日本人の持つスピリチュアリティ概念構造の探索的な分析

～心の問題から生じる社会問題の解決に向けて～

An exploratory analysis of the Japanese conceptual structure of spirituality

和　秀俊　KANOU, Hidetoshi
廣野 正子　HIRONO, Masako
遠藤伸太郎　ENDO, Shintaro
満石　寿　MITSUISHI, Hisashi
濁川 孝志　NIGORIKAWA, Takashi

Abstract

This study claifies the components and structure of the Japanese concept of spirituality. The authors analyzed data obtained through semi-structured interviews of eight men and women aged between twenty and fifty. The KJ method was used to qualitatively analyze the components and the structure regarding their concepts of spirituality. It was concluded that the components of and structure of the Japanese concept of spirituality are: *a sense of values focusing on a connection with others, a sense of oneness with nature, reverence, hope beyond death, safety, freedom from materialism and autonomy.*

Key words: Japanese, spirituality, conceptual structure, qualitative research, KJ method

Ⅰ．はじめに

厚生労働省が実施している『患者調査』（厚生労働省2011）によると、うつ病者数は1996年には43万人であったが、2002年は71万人、2008年には104万人と９年間で2.4倍に増加している。また、ニートは2002年に大きく増加して以降60万人台を推移しており（総務省2012）、引きこもりは、69万人いると言われている（内閣府2010）。自殺においては、1998年には年間自殺者数が32,863人となり、統計のある1897年以降で初めて３万人を突破した。以降は2009年まで32,000人台で推移し、1998年以来年間３万人を超える状況が続いている。2012年は27,858人となり15年ぶりに３万人を下回ったものの、依然として他国に比べて自殺者数が多い（内閣府2012）。このように、現在の日本において、うつ病などの「心の病」や「心の問題」が関連すると思われるニートや引きこもり、自殺などが深刻な社会問題となっている。こうした心の問題の多くはスピリチュアリティの喪失と関連があり、現代社会においてスピリチュアルな価値観の醸成が求められている（大石・安川・濁川2008）。

1998年の世界保健機関（WHO）執行理事会において「spiritual well-being」という概念が取り上げられて以来、わが国においてもスピリチュアリティへの関心が高まっており、特に終末期医療において、人間が経験する生きる意味や目的意識の喪失からくる苦痛であるスピリチュアルペインに対応したケアについて探求されている（竹田・太湯2006）。WHOは、スピリチュアリティは、「人間の生の全体像を構成する一因子とみることができ、生きている意味や目的に関わる」としている。また、これまでのスピリチュアリティの定義を再検討した安藤は、スピリチュアリティとは、「人間に本来備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚を言い表す言葉である」という（安藤2007）。中村は、スピリチュアリティを「市井の人々の日常生活における体験、信念、態度、および価値観の反映された多様な心理的変数であり、それは人々にとって必ずしも自覚され、意識されているとは限らない『潜在因子』である」としている（中村1998）。また、スピリチュアリティの本質は、人生の意味や死の恐怖、神の存在の探求など、人間存在の根底に関わる人間自身の内面性であり、すべての人間が共通にもつ生命の根源であるという（窪寺2004、高橋・井出2004）。

スピリチュアリティの構成概念は、これまでにわが国で開発された代表的なスピリチュアリティ測定尺度から、以下のように整理することができる。改訂版自己超越傾向尺度（STS）を開発した中村は、スピリチュアリティの構成要素として「生の意味と目的」、「霊性の自覚」、「命の永続性」、「自然との一体感」、「無償の愛」、「個人性」、「自我固執」の７つの因子を抽出した（中村1998）。田崎・松田・中根（2001）は、WHOQOL／SRPB（Spirituality Religiousness and Personal Beliefs）プロジェクトにおいて、グループインタビューによる結果の共通項を整理し、日本におけるスピリチュアリティ観を検討した結果、日本人のスピリチュアリティ観の共通項として「自然との対比における人の小ささ」、「自然への畏敬の念」、「祖先との関わり」、「個人の内的強さ」、「特定の宗教をもたないにしても何か絶対的な力の存在を感じること」の５項目を抽

出した。SRS尺度（Spirituality rating scale）を開発した比嘉は、スピリチュアリティの構成概念を、看護学の教科書から「意味と目的、自己実現への努力」、「崇高な力とのつながり」、「死すべき者としての覚悟」、「共同体感覚と強い連帯感」、「感謝と尊敬」、「創造性」、「希望と力の源へのニード」、「調和のとれた関係」、「信念と価値観の表明」という関連するキーワードを抽出した（比嘉2002）。下妻らによって開発された癌などの慢性疾患患者のスピリチュアリティを測定するFACIT-Sp（Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual）の日本語版は、「生きる意味／平穏」と「信念」の２因子から構成されている（野口ら2004）。竹田・太湯（2006）は、文献によるドキュメント分析によって、日本における高齢者のスピリチュアリティの概念構造を検討した結果、「生きる意味・目的」、「死と死にゆくことへの態度」、「自己超越」、「他者との調和」、「よりどころ」、「自然との融和」の６つの概念から構成されていることを明らかにした。

以上のように、スピリチュアリティの構成概念を抽出する研究は数多く行われている。しかしそのほとんどは、欧米の研究をもとに分析したり、看護や介護場面、末期患者、高齢者などに対象を限定したもの、また既存研究を資料としたドキュメント分析が中心である。しかし先にも述べたように、現在の日本において、心の問題から生じる自殺やニート、引きこもりは一般的な若者や中高年者において深刻な社会問題であるにもかかわらず、若者や中高年に共通するスピリチュアリティの構成概念の抽出や尺度が検討されていない。また、若者や中高年者を対象としたインタビュー調査による結果を質的な分析方法によって、スピリチュアリティの構成概念を抽出した研究もほとんど行われていない。竹田らは、日本におけるスピリチュアリティ概念をめぐる現状と課題を整理し、スピリチュアリティ概念の共通性を核としながら、質的研究や精度の高い測定尺度の開発によって、日本人のスピリチュアリティ概念を明確にすることが必要であると述べている（竹田ら2006）。したがって、若者や中高年者に共通する日本人のスピリチュアリティの構成概念をインタビュー調査によって質的に分析し、その結果をもとにスピリチュアリティの傾向を測る尺度開発は重要な課題であると言えよう。

そこで本研究では、日本人のスピリチュアルケアに向けて、まず若者や中高年者に共通する日本人のスピリチュアリティの構成概念を質的研究によって探索的に分析することを目的とした。

Ⅱ．方法

本研究では、スピリチュアリティについて調査協力者の主観的意味世界を射程にしているため、特定の現象だけでなく、社会の文脈の中での人々の感情や認識、行為に焦点を当てる方法である質的研究法（Qualitative Research）を選択した。そして、調査協力者のライフヒストリーも踏まえ、スピリチュアリティについてできるだけ自由に答えてもらうために、半構造化インタビュー（Semi-structured interviews）を行った。

１．調査協力者の選定

若者や中高年者に共通する日本人のスピリチュアリティの構成概念を探索的に分析するため

に、20代、30代、40代、50代の男女１名ずつ（計８名）を調査協力者として選定し、同意書によって調査協力を依頼した。

２．データ収集の方法

調査協力者に都合の良い日時場所を指定してもらい、60分から120分の半構造化インタビューを行い、語りのデータを収集した。インタビューの内容は、調査協力者に同意書による承諾を得た上でICレコーダーに録音し、逐語録をフィールドノートに蓄積した。フィールドノートをまとめている際に、追加して聞きたいことや不明な点が生じた場合は、事前に調査協力者の了解のもと、電話やメールで確認した。調査期間は、2011年10月であった。

３．調査内容

スピリチュアリティの定義や概念構造に言及する既存の多くの文献を参照し、共同研究者と多くの議論を重ね内的妥当性を検討した結果、スピリチュアリティを「スピリチュアリティとは、人間が、幸福な生（価値ある人生）を全うするために不可欠なものであり、『他者とのつながり』、『目に見えない大いなる存在』、『畏敬の念』、『死を超えた希望』、『拠り所のある安心感』、『物質主義からの解放』、『自己評価』などに重きを置く価値観を指す」と定義することとした。この定義をもとに、インタビューガイドを作成した（**表１**）。

表１　インタビューガイド

１．他者とのつながり
　1）個を超えたつながり
　　①あなたは、何かと共に生きていると感じることはありますか。
　　②人間は個別な存在だと思いますか。

　2）自然との一体感
　　①山や川、海などに行ったときに、何を感じますか。
　　②自然をどう捉えていますか（自然とはそもそも何だと思いますか）。

　3）先祖との融和
　　①自分のルーツを意識することはありますか。
　　②先祖代々、何か引き継がれていると感じることはありますか。

２．目に見えない大いなる存在
　　①目に見えない力や存在を感じることはありますか。

３．畏敬の念
　1）畏敬の念
　　①日頃、何かに感謝することはありますか。
　　②神社仏閣など神聖な場所で何か感じることはありますか。

　2）無心
　　①素直な人や無邪気な人と接して、何か感じることはありますか。

　3）宗教
　　①信仰しているものはありますか。

4．死を超えた希望
①あなたは、死をどのように捉えますか。
②人間は死んだらどうなると思うか。

5．拠り所のある安心感
1）幸福感
①あなたは、どのような時に幸せを感じますか。
②あなたは、どのような人生だと幸せだと感じますか。また、満たされますか。

2）安心感
①あなたは、安心できる拠り所はありますか。
（拠り所がない人）あなたは、安心できる拠り所は必要ですか。

6．物質主義からの解放
①あなたの生活の中で、何があると満たされると感じますか。

7．自己評価
①あなたは、他人の意見を受け入れることはできますか。
②あなたは、他人の意見に流されやすいですか。
③あなたは、自己評価と他者の評価のどちらを大切だと思いますか。

4．データ分析の方法

20～50代男女を調査協力者としたインタビュー調査の結果を切片化し、KJ法を用いて分析することによって、日本人に共通するスピリチュアリティを概念化することとした。KJ法は、一見まとめようもない複数多様な情報やデータを、個人の思考だけではなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、これを繰り返すことで新たな意味や構造を理解する方法である（川喜田1995）。

KJ法の特徴としては、以下のようにまとめることができる。①データ収集と分析を別々に行う、②分類と集約を通して、分析前には気付かなかったことを創造的につくりだす、③単なるデータの分類ではなく、分類と結合によって全く新しい意味のまとまりを見出していく、④語りの背後にある構造を読み取ることができる、⑤経験や想いをある程度まで一般化できる、⑥カテゴリー化して見出しをつけることによって、要約、抽象化することができる。

本研究は、和らのKJ法による質的研究方法のプロセスを参考に、具体的に以下の手順で分析した（和・遠藤・大石2011）。

1）オープンコーディング

専門分野が異なる5名（社会福祉学、介護福祉学、健康心理学、スポーツ心理学、心身ウェルネス学）によるオープンコーディングの作業では、各質問内容に関与している言葉や、その前後の文脈を意味単位として切片化し、それぞれの意味単位に対して、それらを的確かつ簡潔に説明し得る概念を付与した。

2）カテゴリー化

概念の類似性や差異性に着目しながら意味の類似した概念をまとめ、具体的な内容を示す低次のカテゴリーを生成し、徐々に類似した低次のカテゴリーをまとめて、より抽象的な高次のカテゴリーを生成した。これらのカテゴリー化は、絶えず概念のテクストデータ内における文脈を考慮しながら、高次のカテゴリーが新たに生成されなくなるまで繰り返された。

本研究では、最終的に最も抽象度が高い高次カテゴリーをカテゴリーとし、その下位に位置する低次のカテゴリーをサブカテゴリー、さらにサブカテゴリーを構成する最も具体性の高い項目を概念とした。これらの一連の分析過程では、スピリチュアリティに関する先行研究における既存の仮説や概念枠組みにとらわれず、書かれているテクストデータからわかることだけを抽出するように細心の注意を払った。

3）妥当性・信頼性の確保

質的研究では妥当性や信頼性を客観的に評価することが難しいため（瀬畠2005）、研究方法や結果が研究対象のリアリティをどの程度反映しているかを示し、確実性を確保する必要がある（村山ほか2009）。そこで本研究では、データ収集・分析方法、解釈の基準や枠組みを研究の中に具体的に提示し、リアリティと確実性を示すことで、研究方法の信頼性と妥当性を確保した。

また、解釈の信頼性と妥当性を確保するためには、専門領域の異なる複数の研究者によって分析を行うことが重要であると指摘されている（ウィリッグ2003、杉村2004、渡邊2004、村山ほか2009）。そこで本研究では、前述の５人の研究者の視点を輻輳化し、異なる研究者間の解釈が収束する点を検索するトライアンギュレーション（Triangulation）を実施した。そして、意味単位と概念の整合性、さらにサブカテゴリーとカテゴリーの内容について５名の解釈が一致するまで議論した。以上のような分析過程を経て、調査協力者の持つ新しい意味や構造を調査することが可能となった。

Ⅲ．結果

１．概念の抽出

インタビュー調査の結果を切片化し、KJ法により概念化の作業を試みた。得られた概念の意味の重複などを慎重に考慮した結果、66の概念を抽出することができた（**表２**）。

２．サブカテゴリーの生成

ここで得られた66の概念から、類似性のある概念を集め、サブカテゴリーの生成を試みた。その結果、以下に示す12のサブカテゴリーが生成された。その過程を以下に記す。なお概念は「」内に、サブカテゴリーは『』内に記した（**表２**）。

「周囲とのつながり」、「個を超えた繋がり」、「共に生きている」、「個を超える」、「共時性」などの概念は、人と人とのつながりではなく個人を超えたつながりを意味するとして『個を超えた

つながり』というサブカテゴリーにまとめた。

「先祖との融和」は、他の概念とのある程度の類似性があるものの、先祖とのつながりという意味はこの概念のみであることから、この１つの概念から『先祖との融和』というサブカテゴリーとした。

「自然に対する感受性」、「自然との一体感」、「自然との融和」、「癒し」、「パワーをもらう」、「絶対的受動性」、「自分と向き合える」、「畏怖する存在」、「神秘的なもの」などの概念は、人が自然と一体となることを意味することから、『自然との一体感』というサブカテゴリーとなった。

「目に見えない世界への意識」、「目に見えない存在」、「大いなる存在」、「目に見えない力」、「謙虚な気持ち」、「霊」、「魂」、「縁」、「運」などの概念は、人の目に見えない大いなる存在を意味するとして『目に見えない大いなる存在』というサブカテゴリーにまとめた。

「感謝の気持ち」、「畏敬の念」、「感謝と愛」、「生かされている気持ち」、「謙虚な気持ち」、「清々しい気持ち」などの概念は、人やモノを敬う気持ちを意味することから、『畏敬の念』というサブカテゴリーとした。

「腑に落ちる」、「信念」、「抱擁力」、「信じること」などの概念は、人が何かを信仰することを意味するとして、『宗教的なもの』というサブカテゴリーとなった。

「目標」、「生を実感」、「生きる意義」、「生きる意味や目的」、「命の永続性」、「生まれ変わり」などの概念は、人の死さえも超える希望を意味することから、『死を超えた希望』というサブカテゴリーにまとめた。

「死の受容」、「現状の受け入れ」、「運命」、「無になる」などの概念は、人が死を受け入れることを意味するとして、『死の受容』というサブカテゴリーとした。

「よりよく生きる」、「幸福な人生」、「いきがい」、「育む」、「幸福感」、「満足感」、「何もかもそろっている」、「喜びの共有」、「家族や友人の存在」などの概念は、人にとっての幸せな人生を意味することから、『幸福な人生』というサブカテゴリーとなった。

「安心」、「安寧」、「拠りどころ」、「家族や友人の存在」、「自然」などの概念は、人にとっての安心を意味するとして、『安心』というサブカテゴリーにまとめた。

「物質主義からの解放」、「無心」、「足るを知る」、「精神性の重視」などの概念は、人がモノを重視する価値観から解放され、精神的なものを重視することを意味することから、『物質主義からの解放』というサブカテゴリーとした。

「自分自身に対する客観的視点と理解」、「依存からの解放」、「プライド」、「他者評価への依存」などの概念は、人が依存せず自らが自律して生きることを意味するとして、『依存しない生き方』というサブカテゴリーとなった。

３．カテゴリーの生成

最後に上に記した12のサブカテゴリーからその類似性や関係性を考察し、スピリチュアリティを構成するカテゴリーの生成を試みた。その結果、以下に示す７つのカテゴリーが生成された。

その過程を以下に記す。なおサブカテゴリーは『』内に、カテゴリーは【】内に記した（**表２**）。

『個を超えたつながり』、『先祖との融和』の２つのサブカテゴリーは、個を超えた存在や先祖という他者とのつながりを意味することとして、【他者とのつながり】というカテゴリーにまとめた。

『自然との一体感』の１つのサブカテゴリーは、他のサブカテゴリーとのある程度の類似性があるものの、自然と一体となるという意味はこのサブカテゴリーのみであることから、この１つのサブカテゴリーから【自然との一体感】というカテゴリーとした。

『目に見えない大いなる存在』、『畏敬の念』、『宗教的なもの』の３つのサブカテゴリーは、目に見えない大いなる存在や信仰する宗教的なものに対して、人は敬う気持ちを持つものであるという意味であることから、【畏敬の念】というカテゴリーとなった。

『死を超えた希望』、『死の受容』の２つのサブカテゴリーは、人は死を受容し、死を超えた希望を持つということを意味することとして、【死を超えた希望】というカテゴリーとした。

『幸福な人生』、『安心』の２つのサブカテゴリーは、人は幸福な人生を送ることによって安心を得ることから、【安心】というカテゴリーにまとめた。

『物質主義からの解放』の１つのサブカテゴリーは、人がモノを重視する価値観から解放されるという意味はこのサブカテゴリーのみであるため、この１つのサブカテゴリーから【物質主義からの解放】というカテゴリーとした。

『依存しない生き方』の１つのサブカテゴリーは、人やモノに依存せず自分自身のことを自分自身で評価し理解できるという意味はこのサブカテゴリーのみであるため、この１つのサブカテゴリーの内容を意味する【自律】というカテゴリーとなった。

表２　日本人の持つスピリチュアリティのカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	概念
他者とのつながり	個を超えたつながり	周囲とのつながり、個を超えた繋がり、共に生きている、個を超える、共時性
	先祖との融和	先祖との融和
自然との一体感	自然との一体感	自然に対する感受性、自然との一体感、自然との融和、癒し、パワーをもらう、絶対的受動性、自分と向き合える、畏怖する存在、神秘的なもの
畏敬の念	目に見えない大いなる存在	目に見えない世界への意識、目に見えない存在、大いなる存在、目に見えない力、謙虚な気持ち、霊、魂、縁、運
	畏敬の念	感謝の気持ち、畏敬の念、感謝と愛、生かされている気持ち、謙虚な気持ち、清々しい気持ち
	宗教的なもの	腑に落ちる、信念、抱擁力、信じること
死を超えた希望	死を超えた希望	目標、生を実感、生きる意義、生きる意味や目的、命の永続性、生まれ変わり
	死の受容	死の受容、現状の受け入れ、運命、無になる
安心	幸福な人生	よりよく生きる、幸福な人生、いきがい、育む、幸福感、満足感、何もかもそろっている、喜びの共有、家族や友人の存在
	安心	安心、安寧、拠りどころ、家族や友人の存在、自然
物質主義からの解放	物質主義からの解放	物質主義からの解放、無心、足るを知る、精神性の重視
自律	依存しない生き方	自分自身に対する客観的視点と理解、依存からの解放、プライド、他者評価への依存

Ⅳ．考察

従来、日本人の持つスピリチュアリティの概念構造は、グループインタビューによる質的研究、文献のドキュメント分析による質的研究、質問紙による因子分析など様々なアプローチで検討されてきた。本研究は、20代～50代の若者や中高年者を対象にインタビュー調査の結果を、KJ法を用いた質的研究によって、日本人が持つスピリチュアリティの概念構造を探索的に検討した結果、日本人が持つスピリチュアリティの概念構造として、【他者とのつながり】、【自然との一体感】、【畏敬の念】、【死を超えた希望】、【安心】、【物質主義からの解放】、【自律】という７項目が抽出された。そこで、竹田ら（2006）が述べているように、先行研究と本研究において抽出されたスピリチュアリティ概念の共通性を核として分析することによって、日本人のスピリチュアリティの概念構造を明らかにしたい。

まず中村（1998）は、スピリチュアリティ概念構造を検討し、「生の意味と目的」、「霊性の自覚」、「命の永続性」、「自然との一体感」の４因子を挙げている。このうち、「生の意味と目的」と「命の永続性」は、本研究における「生を実感」、「生きる意味や目的」、「命の永続性」、「生まれ変わり」などの概念から構成される『死を超えた希望』、このサブカテゴリーなどから成る【死を超えた希望】に符合する。「精霊の自覚」は、本研究の「目に見えない存在」、「霊」などの概念から構成される『目に見えない大いなる存在』、このサブカテゴリーなどから成る【畏敬の念】に重なる。「自然との一体感」は、本研究における『自然との一体感』、このサブカテゴリーから構成される【自然との一体感】に通じる。しかし、【他者とのつながり】、【安心】、【物質主義からの解放】、【自律】の４項目に関しては、共通項が見られなかった。

次に、田崎ら（2001）は、日本人のスピリチュアリティ観の構成要素として「自然との対比における人の小ささ」、「自然への畏敬の念」、「祖先との関わり」、「個人の内的強さ」、「特定の宗教を持たないにしても何か絶対的な力の存在を感じること」の５つを挙げている。このうち、「自然との対比における人の小ささ」、「自然への畏敬の念」との２項目は、本研究の「絶対的受動性」、「畏怖する存在」などの概念から構成される『自然との一体感』、このサブカテゴリーから成る【自然との一体感】にあてはまる。また「特定の宗教を持たないにしても何か絶対的な力の存在を感じること」は、本研究の『目に見えない大いなる存在』、『宗教的なもの』などのサブカテゴリーから構成される【畏敬の念】と重なる。そして「祖先との関わり」は、『先祖との融和』などのサブカテゴリーから構成される【他者とのつながり】に通じる。さらに「個人の内的強さ」は、「自分自身に対する客観的視点と理解」、「依存からの解放」などの概念から構成される『依存しない生き方』である【自律】と捉えることができる。しかし、本研究で見出した【死を超えた希望】、【安心】、【物質主義からの解放】の３項目に関しては共通項が見られなかった。

また、比嘉（2002）は、青年層のスピリチュアリティを構成する因子として「自覚」、「意味感」、「意欲」、「深心」、「価値観」の５項目を抽出した。これらのうち、「自覚」は、本研究の「自分自身に対する客観的視点と理解」などの概念、それらの概念からなる『依存しない生き方』から構

成される【自律】が符合すると思われる。「意味感」、「価値観」は、本研究の「生を実感」、「生きる意味や目的」などの概念から構成される『死を超えた希望』、このサブカテゴリーなどから成る【死を超えた希望】が重なる。「意欲」は、本研究における「よりよく生きる」、「いきがい」などの概念から構成される『幸福な人生』、このサブカテゴリーなどから成る【安心】と捉えることができよう。「深心」は、本研究の『目に見えない大いなる存在』、『畏敬の念』、『宗教的なもの』から成る【畏敬の念】に当てはまると思われる。しかし、【他者とのつながり】、【自然との一体感】、【物質主義からの解放】の３項目は、共通項が見られなかった。

そして、竹田・太湯（2006）は、複数の文献をドキュメント分析した結果、日本人高齢者のスピリチュアリティは、「生きる意味・目的」、「死と死にゆくことへの態度」、「自己超越」、「他者との調和」、「よりどころ」、「自然との融和」の６つの概念から構成されているという。このうち、「生きる意味・目的」、「死と死にゆくことへの態度」は、本研究の「生を実感」、「生きる意味や目的」などの概念から構成される『死を超えた希望』と、「死の受容」、「運命」などの概念からなる『死の受容』、これらのサブカテゴリーから成る【死を超えた希望】に符合する。「自己超越」、「他者との調和」は、本研究の「個を超える」、「共時性」、「周囲とのつながり」、「共に生きている」などの概念から構成される『個を超えたつながり』、このサブカテゴリーなどから成る【他者とのつながり】が重なる。「よりどころ」は、本研究の「拠りどころ」、「家族や友人の存在」から構成される『安心』、このサブカテゴリーなどから成る【安心】と捉えることができる。「自然との融和」は、本研究の『自然との一体感』、このサブカテゴリーから構成される【自然との一体感】に通じる。しかし、【畏敬の念】、【物質主義からの解放】、【自律】の３項目に関しては、共通項を見ることができなかった。

Ⅴ．結論

以上のように、田崎や中村の検討した日本人全体のスピリチュアリティ概念構造、そして竹田らの高齢者、比嘉の示した青年層のスピリチュアリティ概念構造と本研究で導き出した概念構造を比較した。その結果、本研究で得られた構成概念である【他者とのつながり】、【自然との一体感】、【畏敬の念】、【死を超えた希望】、【安心】、【自律】の７項目は、他の日本人のスピリチュアリティにおける研究結果においても抽出されていたが、７項目すべてが含まれる先行研究はなかった。また【物質主義からの解放】はどの先行研究の結果においても抽出されていなかった。したがって、本研究によって抽出された概念構造は、日本人のスピリチュアリティにおける先行研究を支持する結果であったとともに、日本人のスピリチュアリティを構成するすべての概念を含むことがわかった。そして【物質主義からの解放】という新たな構成概念を導き出すことができた。そこで、本研究の結果から、若者や中高年者に共通する日本人が持つスピリチュアリティとは、「人間が、幸福な生（価値ある人生）を全うするために不可欠なものであり、【他者とのつながり】、【自然との一体感】、【畏敬の念】、【死を超えた希望】、【安心】、【物質主義からの解放】、【自律】に重きを置く価値観」という新たな概念枠組みを構築することができたと言えるであろう。

今後の課題として、日本人のスピリチュアルケアに向けて、本研究で抽出した日本人のスピリチュアリティの構成概念をもとに、スピリチュアリティ傾向を測る尺度作りを検討する必要があると思われる。また、先行研究から各世代のスピリチュアリティの構成概念が異なる可能性が示されていることから、竹田ら（2007）が示した高齢者用の尺度の他に、青年層や壮年層のスピリチュアリティの構成概念を抽出し、それに基づいた尺度を作成することも求められよう。

参考文献

安藤治（2007）「現代のスピリチュアリティ」安藤治・湯浅泰雄『スピリチュアリティの心理学』せせらぎ出版，11-33.

ウィリッグ：上淵寿ほか訳（2003）『心理学のための質的研究法入門　創造的な探求に向けて』培風館，59-64.

比嘉勇人（2002）「スピリチュアリティ評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討」『日本看護科学学会誌』22（3），29-38.

和秀俊・遠藤伸太郎・大石和男（2011）「スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程：男性中高生競技者の質的研究の観点から」『体育学研究』56，89-103.

川喜田二郎（1995）『発想法　創造性開発のために（69版）』中央公論新社.

窪寺俊之（2004）『スピリチュアルケア学序説』三輪書店.

厚生労働省（2011）『患者調査』.

大石和男・安川通雄・濁川孝志（2008）「死生観に関する教育による生きがい感の向上―飯田史彦による「生きがい論」の応用事例」『トランスパーソナル心理学/精神医学』8，44-50.

村山孝之・田中美吏・関矢寛史（2009）「『あがり』の発現機序の質的研究」『体育学研究』54，247-263.

内閣府（2010）『若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）』.

内閣府（2012）『平成24年中における自殺の状況』.

中村雅彦（1998）「自己超越と心理的幸福感に関する研究―自己超越尺度作成の試み―」『愛媛大学教育学部紀要（教育科学）』45（1），59-79.

濁川孝志（2009）「環境問題とスピリチュアリティ」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』11，91-110.

野口海・大野達也・森田智視・相原興彦・辻井博彦・下妻晃二郎・松島英介（2004）「がん患者に対するFunctional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual (FACIT-Sp) 日本語版の信頼性・妥当性の検討」『総合病院精神医学』16，42-48.

杉村和美（2004）「事例研究」無藤隆ほか編『質的心理学　創造的に活用するコツ』新曜社，169-174.

瀬畠克之（2005）「質的研究に問われるもの　科学的研究としての背景と課題」『保健の科学』47，353-360.

総務省（2012）『労働力調査』.

高橋正美・井出訓（2004）「スピリチュアリティーの意味―若・中・高齢者の世代比較による霊性・精神性についての分析―」『老年社会科学』26（3），296-307.

竹田恵子・太湯好子（2006）「日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討」『川崎医療福祉学会誌』16（1），53-66.

竹田恵子・太湯好子・桐野匡史・雲かおり・金貞淑・中嶋和夫（2007）「高齢者のスピリチュアリテイ健康尺度の開発―

妥当性と信頼性の検証―」『日本保健科学学会誌』10（2），63-72.

田崎美弥子・松田正巳・中根允文（2001）「スピリチュアリティに関する質的調査の試み―健康およびQOLの概念のからみの中で―」『日本醫事新報』4036，24-32.

渡邊芳之（2004）「質的研究における信頼性・妥当性のあり方　リアリティに至る過程」無藤隆ほか編『質的心理学　創造的に活用するコツ』新曜社，59-64.

山崎章郎（2005）「人間存在の構造からみたスピリチュアルペイン」『緩和ケア』15（5），376-379.